
ハラキリ

早見徒雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハラキリ

【Zコード】

N1851Q

【作者名】

早見徒雪

【あらすじ】

土佐勤王党を率いて全国にその名をどどろかした武市半平太は、前藩主山内容堂らの恨みを買い、投獄されて、もはや死を迎えるだけになっていた。いつしか半平太は、見事に腹を三文字に切り開くことが、己の最後の晴れ姿と考えはじめる。そしてついに、彼に切腹の判決が下された。切腹の場に出向いた半平太は、なんとその場にあの容堂が来ていることに気が付いて……。

「武市先生」

牢下番の佐蔵の声がした。半平太はゆっくりと瞼をひらく。さもその声で起きたかのように見えるが、すでにこの数ヶ月、夜はまともに眠れた日などない。日中でも横になつていることが多くなつていたが、たとえ眠れたとしても、夢うつつのままで、半刻もせずにすぐに目覚めてしまうことの繰り返しであつた。

「おはようございます」

佐蔵は牢の鍵を開け、中腰のまま枕元まで進んできて、深く頭を下げる。半平太は目だけでちらりとその大きな体を見ただけで、特に頷くわけでも声をかけるわけでもなく、すぐに視線を天井へと向けた。

「……失礼いたします」

佐蔵は枕と首の隙間から手を通して、向こう側の肩に手をやつて、なるべく優しく半平太の上体を支えて起こしてやつた。小さく丸くなつた背中は、変に力を込めてしまつとぼろぼろに崩れ落ちそうで、必要以上に力を加減し、気を使わなければならなかつた。極度の緊張のためか、佐蔵は額にすでに大粒の汗を浮かべている。

「……おはようございます」

次に入ってきたのは同じ下番の喜太夫である。彼はあいさつもそこそこに佐蔵と目くばせをし、佐蔵が半平太の上半身をかかえて腰を浮かせると、その足をたたんで、半平太を布団の上に正座させた。その後、布団の両端をつかんで、ゆっくりとその体を敷布団「ごぐるり」と左へ回転させる。わずか一畳あまりの牢の中で大柄な男たちが動き回るのは非常に窮屈であったが、一人で起きることもかなわず、またその体勢を維持することも動かすことも困難な状態では、黒子の役割を勤めるものが何名か必要となるのであつた。

半平太が向けられたのは、そこから北東に位置する方角である。

彼は下番たちの介添えの手を払い、息を大きく吸い込んでできるかぎり背筋を伸ばした後、手を突いて深く平伏した。それは京都の方角であった。やがて顔を上げると、喜太夫がすぐさま別な方角に敷布団を調節する。次は真北。高知城の方角である。再び半平太は平伏する。最後は大きく南へまわった。そこは藩祖たる山内一豊をはじめ、山内家の墓所のある筆山があつた。半平太は三度目の平伏を行つた。

これらは、半平太が入獄前から毎日行つてきた朝晩の儀式である。土佐でも京でも、たとえどんな場所であつても、欠かさずに行われてきたことであった。京の御所にいる孝明帝、高知城に滞在している山内容堂・豊範の藩主親子、そして静かに眠る歴代藩主たち。彼らに對して畏敬と深謝の念をあらわす行為であつた。それらはたとえこの身を自由に動かすことがかなわぬようになつた今この状況においても、決して怠ることの許されない決まりごとなのであつた。思えば半平太がこの獄につながれてから、すでに一年九ヶ月の月日がたつている。上士格の牢とはいえ、三方を厚い板塀に囲まれた狭くて暗い不衛生な場所である。長く辛い尋問が何度も繰り返されたこともあり、半平太の体力はみるみると落ち、このところは重い病を患うこともあつた。そしてその風貌など身体の劣化が進むにつれて、それに比例するかのように半平太自身はだんだんに意固地になり、偏屈な態度が目立つようになつていていた。

佐蔵にせよ喜太夫にせよ、以前から半平太を崇拜していたし、この牢ではじめにその噂どおりの威風堂々とした態度を直接目の当たりにした後は、ますます心酔の度を深め、他の下番たちと先を争うようになつて、彼の世話を焼いたものであつた。しかしそれに次第に彼らは、半平太をもてあますようになつてきていた。この奇妙な礼拝が終わつたとしても、今度は半平太に朝食をとらせなければならないし、時には中途で廁にも連れて行かねばならない。さらにそれらの介添えに對して、半平太はただなされるがままになつてているだけで、感謝の意を示すわけでもない。このところは特に難しい顔をしたまま横に

なっているだけで、笑いもしなければ喋りもしない。何より彼らはいつも他の仕事を山のように抱えていて、ずっと半平太にかかわっているわけにはいかないのだ。この奉仕 자체に張り合いなど見出せず、いたずらに精神も体力も消費させられるにいたっては、これがいつまで続くものかと、気が重くなるのもやむをえないことであった。

当の半平太にしてみれば、下番たちの思惑など、露ほどの関心も抱いていなかつた。彼らの甲斐甲斐しい世話や、幾重にもはかられてきた便宜などは、別に彼が命令してやらせているわけではない。あくまで彼らの身勝手な善意である。それはそれとして素直に受け入れてやつてはいるだけでも、自身が攻められるような筋合いのことではないはずだと、今では考えていた。

いや今だけでなく、以前から半平太には相手のことを慮る気持ちが、常に欠けていたのであった。

半平太が土佐勤王党を結成したのは文久元（1861）年八月のことである。時はまさしく尊皇攘夷論が、若い志士たちの間で最高潮に盛り上がりをついていた時期でもあつた。彼は京で長州や薩摩の有志たちと交わりを持ち、いざれ各藩主を擁して上京し、幕府を倒し天下の牛耳る算段を熱く語り合つていた。勤王党の結成は、その野望の第一歩であり、藩政の統一を行うための活動媒体の構築のためにもあつた。勤王党は下級武士や郷士を中心に、ぞくぞくと党員を増やしていった。

しかし、やがて半平太は藩政をまとめることだが、いかに難しいことであるかを思い知らされることとなる。何より、上士以上の賛同者を集めることができて困難であった。土佐における上士と郷士との間に横たわる溝は、さらに徳川三百年に蓄積された恨みつらみが加わり、あまりにも深く険しく強大なものとなつてはいたのである。

人間は自らに利することがなければ、なかなか動こうとはしない生き物である。郷士たちはその虐げられた生活からの脱却を夢見る

ことが出来たが、上士たちは自らの利権を失うことをただただ恐れていた。薩長などと違い、土佐山内家は関ヶ原で東軍に組した側でもあるため、今の徳川幕府を倒すなどという考えを積極的に持とうとしないことも理由の一つであった。

それでも半平太は、土佐藩は上下ともに協力し、一つとなつて進まなければならないと考えていた。そうでなければ意味がないと考えていた。それには彼なりの大きな理由がある。武市家は今から三代ほど前に、「白札」という上士と下士の間に位置する立場を与えられていた。いざとなれば上士にも藩にも意見を述べることの出来る身分である。このことに対し、半平太は藩に対して深い恩義を感じていて、その御恩を何とかして返したいと願っていた。受けた恩には必ず報いる。単純だが一筋縄ではいかない困難な道理に、彼はこだわったのである。他藩のいわゆる「草莽」運動が、藩や藩主を見限り、下級層の志士たちだけで世の中を変えていこうとする風潮の中で、土佐藩だけは、いや半平太だけは、「上は藩主から下は草莽にいたるまで」、いわゆる「闇藩勤王」の思想を根本にしようとしていた。

暗殺前の東洋がそんな半平太の考えを「書生論」として一笑にふしたように、それはあまりにも甘い考え方であった。個々の考え方や目的意識が大きく異なる集団をまとめ上げるには、彼はまだまだ能力が足りなかつたし、なによりもまだ若すぎた。人間の性質についても、あまりにも無知であった。彼の意思是、ずっとと空回りするばかりであった。そこで半平太が時間をかけて、その考えをゆっくりと熟成させ、地道に活動を行つていれば、おのずとよい方向に向い、なにかと光明を見出していたのかもしれない。ところが、彼の取った方法は、あまりも短絡的な術であった。

彼は吉田東洋が容堂の覚えめでたく藩政の中心にいること、そして勤王党の運動を先頭に立つて妨害していることを知るや、この男を排することが、自らの理想を実現するための第一歩であると考えた。その目的のためには主義主張のまったく異なる、保守派の面々

とも手を結ぶことさえも辞さなかつた。勤王党の中から腕の立つ者を何名か選び、暗殺計画を練りに練つた。一度でなく一度三度と襲撃の機会を想定し、その度ごとに人員を変更するという暗い周到さであった。そしてついに文久二年四月八日、勤王党の刺客三名が東洋を殺害し、さらにはその首を晒すという暴挙にでたのである。

このときから大義名分の陰に隠れて、彼の思想は徐々にいびつな方向へと向き始めていった。見事藩政の中心部へと入り込むことに成功し、京都では自分たちの活動の障害となる人物を「天誅」の名の元につぎつきと排していった。他藩と共に公家連中を巻き込んだ攘夷運動はさらなる高まりをみせ始め、半平太は得意の絶頂にいた。なんでも彼の思い通りに進んでいくように、ことをしつらえるのであるから当然である。

もつとも、彼を取り巻く人々は、半平太が思い込んでいるような人間たちばかりではなかつた。その代表はやはり元藩主たる山内容堂であつたろう。彼は半平太が東洋を暗殺したことに対して恨みを抱き、かつ何かと口を挟んでくるその態度を忌み嫌つていた。世論の流れを見極めることに長けた容堂は、勢いのある尊王攘夷運動（これ自体彼が当時最も嫌つていた思想なのである）にただ乗つかつているだけで、もしもそのほころびが見え始めた際には、すべてをひっくり返そと虎視眈々と狙つていた。十分に気をつけていさえすれば（いやさほどの注意を必要としなくとも）容堂の真意は、その態度や言動から容易に推察できたはずなのだが、半平太は自身の思い込みで目を蒙らせていたので、それらをすべて見落としていたのだった。

さらに半平太たちの行動はあまりにも急進的過ぎた。その結果、対立する公武合体派の恨みを急速に買うこととなり、薩摩と会津が水面下で手を組んだことで、一気にクーデターが引き起こされてしまったのである。世に言つ八月十八日の政変であり、これぞまさしく大逆転となつた。

これも軍事力・政治力に長けた薩摩の暗躍を見張つておけば、も

しくはきちんとした情報網を確立しておけば、未然に防げたかもしれないことであった。だが現実はそうではなく、尊王攘夷派は京都から一掃され、同じように追い出された長州藩はやがて朝敵の汚名を受けることとなり、土佐では半平太を含めた勤王党の面々が繰々逮捕される結果となつた。半平太の理想はこゝにしてあえなく頓挫してしまつたのである。

そして半平太はひとり横になつて汚れた天井を見上げている。こゝ最近、日中は以前と比べて大分静かになつた。だがそれは彼以外の土佐勤王党の面々に対する拷問が行われなくなつたからであり、そしてそのことは彼らに対する沙汰が決したこと意味しているのであつた。

獄にとらわれた勤王党の面々を取り調べていたのは、かつて吉田東洋の門下で学んでいた者たちであつた。彼らは東洋を暗殺したのは半平太の指示によるものとして、彼に根深い恨みを抱いていた。今回の逮捕とそれに続く拷問は、その事実を白口の下にさらすことが最大の目的でもあつた。

ところが意に反して勤皇党の団結心は固く、他の暗殺にはべらべら余すことなく喋つた岡田以蔵ですらも、（彼は直接東洋暗殺にはかかわつていなかっためか）その証拠となるべきことには一切口をつぐんだままであつた。取調べにあたつた監察府の面々は手を変え品を変え、時には厳しく時には甘言を持って懐柔しようともしたが、思うような結果に結びつかないままであつた。やむをえず、半平太に対しては数々の容堂への忠諫が不敬行為に当たるものとして、他の党員たちには「天誅」と証した暗殺行為に加担したものとして、裁くこととしたのである。

その結果は中番である門谷貫助からひそかに詳細を伝え聞いていた。一応上士扱いの半平太は切腹。他の郷士たる勤王党員は斬首。ほぼその処置に固まるであろうと。

よりもよつて「不敬」とは……。朝晩の例の儀式に示されると

おり、半平太の容堂にたいする敬慕の深さは並々ならぬものであつたはずだつた。そのために時にはあえて厳しい忠諫も行つてきただではないか。ところがその忠信の結果がこれなのである。

捕らえられた直後の頃は、まだまだ余裕もあつた。時勢がまたかわり、尊王攘夷論が巻き返すことがあれば、自分がまた必要とされるはずだという思いもあつた。その「いつか」のために、獄吏たちが半平太を慕つてることを幸いに、追つ手から逃れている勤王党の同志たちや、長州をはじめとする他藩の尊王家たちと、この牢から密に連絡を取り続けていた。しかしながらもたらされる情報は、次第にどれも暗く重苦しいものばかりとなつていくのであつた。

例えば土佐を見れば、半平太たちの出獄と攘夷の決行を要求し、野根山に籠もつた勤王党の残党たちは、あつさりと捕縛され、皆一言の抗弁の機会も与えられずに首を切られてしまつた。他藩では、半平太と特に思いを通じ合つてきた長州の久坂玄瑞が、藩の進発論派（武力をもつて京都に進発し長州の無実を訴えようとする派）たちと賛同して兵をあげ、京都で薩摩・会津と戦い敗れ自刃した（蛤御門の変）。この久坂の死の報せ以降から、半平太が床に着くことが増えていつたのも偶然ではあるまい。

もはや、これまでか。

半平太は自らの腹をさすつた。かつて江戸の桃井道場で塾頭までつとめたころの、堅固な肉体はそこにはなく、脂肪でたるんだ肉の塊があるだけであつた。食事もまともにのどを通らぬ状況で、手足や顔は痩せさばえてしまつてゐるのだが、なぜか腹から腰の辺りから重い肉が離れようとはしなかつた。もう少し見栄えのよい体躯にまで戻したいとは思うが、病身の身体ではそれもままならない。ならばせめて、せめて堂々とした切腹を果たさなければ。そのように半平太は思い始めていた。

腹を切る。それも見事なやり方で。最後の意地を、己の理想を踏みにじつた者たちに見せ付けてやるのだ。

江戸時代の中期には切腹はもはや形骸化されたものになつていて

が、幕末期においてその作法に新たな関心が注がれるようになつて いた。この時代に活躍した志士たちの多くは、貧しい階級の者たち であり、彼らはより武士らしく生きることや死ぬことに異様なこだ わりを抱いていた。切腹もそれを示す重要な要素の一つであり、い かに古来の作法に沿うか、いかに見事に腹をさばけるかということ に、意義を見出そうとしていた。半平太もそんな一人であったので ある。

「およそ切腹といつものには、腹を真一文字にかづさばくことを例と するが」

実はこの日よりも前、今よりもはるかに元気であった頃、半平太 は中番である門谷貫助に次のようにもらしている。

「この他にも十文字と三文字に切るといつ一通りの方法があるよつ だな」

「……左様で」

貫助は半平太が突然そんな話をはじめたので、いささか面を喰ら つた顔をした。

「もしもその時が来たときには……」

半平太はそんな貫助の戸惑いをまつたく意に介さず、どこか諦観 した表情で、

「わしはそのどちらかを行おうと思つ。……必ずな ど、「必ず」という言葉に力をこめてつぶやいた。

「……」

貫助はなんとも複雑な気持ちで半平太を見つめるより他なかつた。 そして、先程から床に体を横たえたまま感じているのは、今この 体力では、一文字に切ることですら難しいのではないか、という 恐れであった。衰えたまま監察府の面々の前に突き出され、自ら腹 に刃をたてることもかなわず、介錯人たちからただ首をはねられる ことだけは、なんとしてもさけなければならぬ。それは彼の自尊心 が許さなかつた。半平太の体は小刻みに震え始めていた。

今ならできる。今ならせめて一太刀はさばくことが出来る。

いや、十文字に刻むことまでなら。

早く、早く、その沙汰が来ぬものか。

いつしか半平太はその死を待ちわびるようになっていた。なんと
しても引き際を飾らなければならぬ。なんとも奇妙な強迫観念が半
平太の頭の中を占め始めていた。ここでも彼の考えはいびつな方向
へと向かっていっているのであった。

そして今度は、その希望すぐにかなえられた。

「武市半平太。右の者、去る酉年以來、天下の形成に乘じ、密かに
党与を結び、人心扇動の基本を醸造し、爾來、京師高貴の御方へ容
易ならざるの儀、屢々申上、將又御隱居様へ度々不届の義申上候事
共、總て臣下の所分を失し、上威を輕蔑し、國憲を粉粋し、言語道
断重々不届の至、屹度御不快に思召され、嚴科に処されるべき筈之
処、御慈惠を以切腹これを仰せ付けらる」

大監察後藤象二郎の低い声が浪々と響き渡つた。おおよそ宣告文
の内容は、事前に想定したとおりのものであった。切腹である。

「……仰せわたされたる趣、畏みて拝受し奉る」

半平太の小さくもはつきりした声が、その礼を返した。そして切
腹はその日のうちに行われることとなつた。

その顔にかすかな笑みが浮かんでいたことに、気がついたものは
その場に何人いたことであろう。

半平太は、すぐさま獄舎に戻り、事前に妻の富子より差し入れさ
せておいた白装束の袴に着替えた。当然一人では行うことは出来ず、
下番の佐蔵たちや中番の貫助もやつてきて着替えを手伝つた。今朝
までは半平太の世話をへきえきしていた佐蔵たちだったが、さすが
にこれが最後の奉仕だと思うと、目に涙を浮かべるのであった。

それに対して、半平太の顔は憑き物が落ちたかのように、さつぱ
りとしたものであった。

牢の外には上番たる上田円増が控えていた。彼もまた半平太に心

酔していた人物の一人で、時に上役人からの強い叱責を受けながらも、この獄舎で最大限の優遇を彼に与え続けた人物である。さすがに半平太はこの男に対しては、着替えが終わつて牢を出る際に軽く目礼をした。円増はそれに応えつつ、半平太の表情が思った以上に温和であることに気がついた。

……さすがは土佐勤王党の盟主。この場におよんでも、見事な立ち振る舞いであることだ。

円増は心中で感嘆しながら、切腹の場たる南会所大広庭まで引率した。半平太はここでも一人で歩くこともかなわず、左右を下番たちに支えられての移動である。大広間はすでにとつぶりと日が暮れており、蠅燭のかすかな明かりが庭の中央にしかれた切腹の場を照らしていた。すでに介錯人として、島村寿太郎・小笠原保馬の二人が控えている。

「一」苦労

半平太は中央に座すると、顔を上げた。座敷の方には大監察である後藤象一郎をはじめとして、監察府の面々がずらりと勢ぞろいしていた。暗く距離があるため、互いの表情まではわからない。積年の恨みをはらすことができたという満足げな表情なのか、それとも東洋暗殺を罪状に組み込めなかつたことに対する無念さが現れるのだろうか。一方、半平太にしてみれば、もはや彼らのことなどどうでもよいことであつた。それよりも、何この晴れの場を与えたことに対する喜びと、この後の「見せ場」を何とか成功させねばならないという意気込みだけが、彼の頭の中を閉めていたのであつた。

とその時、半平太はふと、この南会所の奥座敷の方に御簾がおろされていることに気がついた。その奥から何者かの視線が注がれているように感じた。

容堂公がお見えになつている。

半平太はなぜか確信した。

かつての土佐二十四万石の大藩主が、一介の白札郷士の切腹の場

を訪れるなど前代未聞の出来事と言ひほかない。容堂にとつて、武市半平太という男は、それほどまでに気になる存在であり、もしくはそれほどまでに恨みつくる存在であつたといふことなのだろうか。どちらにせよ、半平太は内心感激し、打ち震えた。

容堂公のためにも立派な最期をお見せしなければならぬ。

急がなければならなかつた。半平太は方式に則つて、諸肩を引き抜いて帯際を寬げると、懷劍を手にしてすばやく木綿切れで刃をまいた。蠟燭のあかりが、怪しくその刃を輝かせる。

そして背筋を伸ばし、かつとまなこを見開いて、一気に懷劍を左の腹部へ突き刺した。

「むう……」

その場の全員が息をのむ音が聞こえる。すぐさま介錯人の二人が近寄つてこようとした。

「待て」

半平太は低く制した。まだ一太刀も切り裂いてはいない。まだ止められるわけにはいかぬ。

「えい！」

刃が左から右へと一直線に切り裂かれた。言葉にならぬほどの激痛が、全身を走る。かつて彼が「天誅」の名の元に、斬り殺してきた者たちが受けた痛みと、どれほどの差があつたことだろう。血があふれ、腸が顔をのぞかせ、何とも言えぬ滑りと温もりとが、腰から下にもたらされる。半平太は息を止め、歯を食いしばり、ゆつくりとその刃を腹から抜き取つた。

「えい！」

さきほどよりやや下部のあたりに突き刺す。意識したわけではな
いが、へそを避けるような位置恰好となつた。半平太はまた右へ切り裂こうとしたが、その右手が動かない。あまりにも懷劍を持つその手に力を込めすぎているせいであろうか。それとも半平太の体の方が、これ以上の苦痛を拒絶したのであるうか。だが、

「……」

半平太は左の手をその手の上から添えて、押し込むようにして動かした。ぶちぶちと肌か血管かが擦り切れる嫌な音がする。刃は腹の中央あたりでまた止まつた。そして半平太は息を吸つて、

「うおおおっ！」

と大きく吠えて、両手で懐剣を腹から引き抜く。おびただしいほどの血があたり一面に飛び散つた。その刀を握り締めた手だけでなく、全身の震えが止まらず、滝のような汗が滴り落ちる。だが振るえながらも、その手はゆっくりと下の方へと動いていく。あと一太刀……。

そしてついに懐剣は先ほどよりもさらに下の位置で、そこに刃を突き立てて止まつた。

「……！」

だが、ここでもその手が動かなくなる。今度は刺し込むことすらできない。体も意識も、もはやそれを行うだけの力を残していないかのようだつた。……すると、

半平太は刀の柄を地べたに押し付けた。そしてそれを支えにするようにして、その上から全体重を載せるように覆い被さる。刃先がわずかに肉の中にのめり込んだ。噛み締めた奥歯が砕け、口からも鮮血が滴り落ちる。そして、

「きええい！」

手ではなく、体の方を動かすように横へとひねつた。わずかばかりながら肌が切られ、これで三度、腹が裂かれた。三文字切りが完成した。監察府の面々は言葉もなく、半平太の「晴れの舞台」に目を奪われている。

「う……」

ついに半平太が崩れた。腹からでた臓物の重みで、己が流した血の海の中に、上体をゆっくりと沈ませていく。ゴボゴボという音と共に、大きな泡が血の中から沸き立つていた。その音に介錯人たちもはつと我にかえつた。すぐに一人はその刃を左右から幾度となく半平太の体につきたてた。だがすでに半平太は絶命していたらしく、

もはや何の反応も見られなかつた。

「……見事であつた」

後藤の口からその言葉が出たのは、さらに時がたつてからである。それはここにいる人々にとって、これまで、いやこれからも目にすることの決してない、壮絶な一幕であつた。こうして半平太の最期の面目は、十二分に果たせられたかに見えた。

だがしかし。

何処からか強い夜風が吹き、南会所の奥座敷の御簾を動かした。その御簾の向こうには、誰の姿も見えなかつた。

半平太が大広庭に連れて来られる以前から、誰もそこに座したものなどいなかつたのである。もちろん容堂が城からこの場に出向くことなど、もともとありえないことなのであつた。

なぜ半平太が死の前に容堂がそこにいるのだと思い込んだかはわからない。ただ一つだけ言えることは、半平太の想いはとうとう最期まで一方通行のままで終わつてしまつた、ということであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1851q/>

ハラカリ

2011年1月15日20時40分発行